

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

林士平 漫画編集者

Shihei Lin / Manga Editor



CREATOR
INTERVIEW No
163

林士平 Shihei Lin

2006年、株式会社集英社に入社。「月刊少年ジャンプ」「ジャンプSQ.」の編集者を歴任し、現在は株式会社ミックスグリーン代表取締役・「少年ジャンプ+」編集部員。連載中の担当作品は『SPY×FAMILY』『チェンソーマン』『ダンダダン』『幼稚園WARS』『BEAT&MOTION』『ケントウリア』『おぼろとまち』『クニゲイ〜大國大学芸術学部映画学科〜』。過去には『青の祓魔師』『この音とまれ!』『ファイアパンチ』『怪物事変』『左ききのエレン』『地獄楽』『カッコカワイイ宣言!』『ルックバック』『さよなら絵梨』他多数の立ち上げ作品を担当した。

No

163

林士平

漫画編集者

SHIHEI LIN / Manga Editor

体験と同じくらい大切なのは、想像力を育てること。

クリエイターインタビュー

『六本木で大規模漫画展を開催してみる』

published_2024.12.25 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

『SPY×FAMILY』『チェンソーマン』『ルックバック』『ダンダダン』といった国内外で高い評価を受ける漫画作品の編集を手掛ける林士平さん。2006年に集英社に入社し、月刊少年ジャンプに配属されましたが、入社一年後の2007年にジャンプSQ(スクエア)編集部へ異動し創刊編集者の一人となりました。その後、2018年に自らの希望で少年ジャンプ+(プラス)編集部へ異動。2021年には、同誌の副編集長を務め、数々の担当作品を大ヒットに導きました。2022年に集英社を退社、現在はフリーランスの編集者として活動しています。作家との深い信頼関係や鋭い企画力を武器に、急速にグローバル化が進む漫画文化のさらなる発展を支え、今最も注目を集める漫画編集者の一人である林さんに、編集を行う上で大切にしていることや漫画の未来についてお話を伺いました。

漫画は仕事であり、趣味。

僕にとって漫画とは仕事であり、趣味なんです。仕事としてはもちろんそうなのですが、プライベートでも、漫画を読むのが本当に好きで。漫画は、移動中などの隙間時間にでもストレスなくさっとたくさん読めるのがいいですね。漫画編集者は、どの漫画を読むときにも仕事目線が入ってしまいそうだと思うのがちですが、意外と純粋に読んで、楽しんでいる気がします。実は、もともと漫画編集者になりたかったわけではないんです。学生の頃から、ただ趣味の一つとして見ていたものの、深く分析したことはないですし、真剣にその道を進むことも考えたことはありませんでした。就職活動をしていたときに「自分の好きなものの業界を軽く覗いておくか」ぐらいの感じで1社、集英社を受けたのがきっかけでした。

入社一年目で出会った社内編集者の大先輩が、何十年も業界に携わっている人で、漫画家への心配りが徹底していました。手みやげや作品を拝見するときの姿勢だったり、気遣いの塊のような人で。僕はどちらかというと気遣いが得意な人間ではなかったのですが、入社したときにその基準の最高値を見せてもらったことによって、人に対する意識が矯正されていった感覚があります。気遣いや誠意が漫画家に伝われば、自然と信頼を得られると思うんです。

漫画家との関係は長期的なもの。

今でもどの漫画がヒットするかというのは、わからない状態でずっとつくっています。人気作品になった目立つタイトルが担当作品として認知されていますが、実はそれらの作品以外にも同時に 100 人前後の作品を担当しているんです。野球での打率3割はスーパースターみたいな感じだと思うんですけど、僕はそれでいうと打率1割以下だと思います。もちろん売れている作品もあるので、とても嬉しいですが、名前が知られてない若い漫画家の人生もかかっているんで、はしゃぎにくいところもあります。できれば担当している全員が売れてほしいんです。昨年ぐらいからアシスタントを付け始めたので、自分の目が行き届かないところのフォローアップをもう少し効率化できるように試みているところです。

漫画家にとって、作品づくりは時間がかかるものなので、2週間に1本新作を持ってくる方はレアですね。1ヶ月に1本の方もいるし、2、3ヶ月に1本の方もいます。5年 10 年と時間をかけて打ち合わせをして、作品をつくり続けていくという仕事なんです。『チェンソーマン』の藤本タツキさんも『SPY×FAMILY』の遠藤達哉さんも 10 年、15 年以上の付き合いになります。



『チェンソーマン』

藤本タツキによる少年漫画。2019年から2021年まで週刊少年ジャンプにて第1部「公安編」が連載され、第2部「学園編」は少年ジャンプ+にて2022年より連載。同年にアニメ化され、コミックスの累計発行部数は2,900万部を突破し高い評価を得ている。

画像: ©藤本タツキ / 集英社



『SPY×FAMILY』

遠藤達哉によるスパイ・超能力者・殺し屋による偽装家族が贈るスパイアクションコメディ漫画。2019年に「少年ジャンプ+」で連載を開始し、コミックス既刊14巻のシリーズ累計発行部数は、3,600万部を超える。TVアニメ化、ミュージカル化、原画展の開催、劇場版アニメ化など様々なメディア化も展開。2023年には、第52回日本漫画家協会賞コミック部門大賞を受賞した。

画像: ©遠藤達哉 / 集英社



published_2024.12.25 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

海外からも漫画の感想が送られてくる。

漫画の編集をしていてやりがいを感じる瞬間は読者が喜び、漫画家が喜んでくれたときです。多くの人に読んでもらえることやっぴり幸せですね。今は読者の感想が SNS やオンラインなどから拾いやすくなっていて、それは嬉しい反面、残酷なことでもあるんです。オンライン上だと読者の人数を精密にすぐに確認でき、送り出した作品が読者にどう響いているかが顕著にわかるんです。喜ぶときは共に時間を共有し、苦しいときはどれだけ苦しさに寄り添ってあげられるかが大切になってきます。

日本の日付が変わるタイミングで、世界にも同時に最新話が配信されるんです。7、8言語ぐらいに対応し、配信後すぐに日本語以外の感想も届くので、翻訳機を通して確認する度に、昔以上に多くの人に届いているなという実感があり、嬉しくなります。日本だけの部数だと、なかなか、50 万部 100 万部と積み上げるのは大変ですが、海外を含めると、大部数にたどり着ける作品が、ぐっと増えるんです。



林士平 漫画編集者

SHIHEI LIN / Manga Editor

published_2024.12.25 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

実際に経験してきた日本の文化を基盤に。

日本の漫画は世界でも認知度が高いですが、過信するのは危険だと思っています。週末に映画を見たり、バーベキューに行ったり、ボーリングをしたり。漫画が、そういった娯楽と肩を並べるくらいのエンタメであればいいなと思うし、それが日本だけに留まらず、いろんな国の人にとっても日常的なエンタメの選択肢になっていければ嬉しいです。

海外の読者にもわかるように、と、グローバルなアウトプットにする、というよりは、これまで漫画を読んでくれた方や読者を想像しながら編集しています。海外の読者を意識しているのであれば『ダンダダン』で、日本独自の怪異である、ターボババアのくだりはいれないですよ（笑）。僕はこれといって海外の友人が多いわけでもなく、海外の若者の趣味嗜好を網羅しているわけでもないです。また、海外と一言でいっても、アメリカとヨーロッパの国々でも違うと思いますし、ヨーロッパの中でも各国でそれぞれの文化がありますよね。自分が肌感として理解している日本の文化の経験をベースに、作品づくりをしています。

想像力を刺激するのは今までに体験したこと。

日本で漫画文化が豊かなのは、シンプルに日常で漫画に触れる数が、他の国と比較して、はるかに多いからだと思います。その分、多様な漫画表現に触れてきているわけだし、おそらく日常的な会話の中でも漫画のキャラクターとかストーリーについて話しますよね。その部分が日本の漫画の偏差値を上げて、基礎力が高くなりやすいのじゃないかな。

漫画を描くうえでは、体験してきたことと想像力の両方が必要になってくるのですが、体験したことからしか抽出することのできない匂いや質感などの情報は、実際に感じたうえでアウトプットする方がよりリアリティを帯びます。想像力を刺激するのも今までに体験したことが必要になってくるんです。売れている漫画家の大半はどこか観察力が長けているというか、好奇心旺盛な人が多いです。意識的にしているというよりかは、どちらかというとも無意識に行っている印象です。

編集者は、たくさんの作品を見て面白い物語やキャラクターを生み出せる漫画家はどうかやっ
て生まれるものなのか、また、作品をどうベストな形で読者に伝えるのかを理解している必要
があります。各々の漫画家にできる限り寄り添っていくのも、良い作品を読者に届けるために
大事な要素の一つです。

漫画の今後にも期待している。

これから日本の人口は減少していくので、それと比例して日本で漫画を描く人も減っていっ
てしまうのではと考えています。ただ、世界でも漫画文化は広まっているので、日本人以外の
漫画家も増えていってくれたら嬉しいですね。世界中で漫画の描き手が増えていけば、今後も
漫画の文化自体は廃れずに広がっていくのかなど。老後まで楽しい漫画が読めそうではありま
すね。

毎年京都で開催している、京都国際クリエイターズアワード「コミックコンテスト」で審査
員をしているのですが、今年は70カ国ぐらいから応募がありました。オンラインでは海外から
自動翻訳を使った企画の持ち込みがあります。2、3年前には重慶に住んでいる中国の漫画
家の連載も担当していました。アメリカやヨーロッパなどにもどんどん広がっていけば、それ
は素晴らしいことだと思います。

「編集」という観点では、他の国の人でも根本的な作業は変わらないんです。ただ、言葉
の壁があるとその分のプロセスが多くなるという感じです。それ以外は本当に日本の漫画家と
同じ作業内容です。

京都国際クリエイターズアワード「コミックコンテスト」

「コミックコンテスト」は、マンガ・アニメ等のクリエイター志望者が、京都を通じてプロデビューする機会を創出す
ための、国際コンテスト。コミックコンテストとデジタルアニメコンテストの2つのコンテストを開催しており、
テーマは自由。過去の受賞者には、現在ジャンプ+にて連載中の漫画家も。

街全体を漫画のイベント一色に染める。

最近、アメリカのニューヨーク・コミコンやフランスの Japan Expo Paris など、海外の展示会にも行くようにしています。コミコンに行くと、びっくりするぐらい日本の漫画とアニメばかりなんです。日本の漫画・アニメフェスと変わらない景色が広がっていて、現地の熱量を感じられるのでとてもいい勉強になっています。特にニューヨークやパリでは超巨大エリアを使ってイベントが行われていて、そういったイベントのときは、街全体もそのイベント一色に染まるんです。六本木でも街全体を会場にした展示会ができそうですし、もし実現できたら面白いなと思いました。例えば、国立新美術館をスタート地点として、森美術館まで4ルートぐらい用意して、装飾して展示するとか。もし実現できたらいろんな国の方が遊びに来る大型のイベントにできそうですね。イメージは、数年前に大英博物館で開催された漫画展「The Citi exhibition Manga」に近いかもしれません。特定のコンテンツに偏ってなく、アートとしての観点からもしっかりとアピールされていた素晴らしいイベントでした。



ニューヨーク・コミコン

ニューヨーク・コミコン(New York Comic Con, NYCC)は、アメリカ・ニューヨーク市で毎年開催される大規模なポップカルチャーイベント。漫画、アニメ、映画、テレビ、ゲームなど多岐にわたるジャンルを取り上げ、ファンやクリエイターが一堂に会する場として知られる。

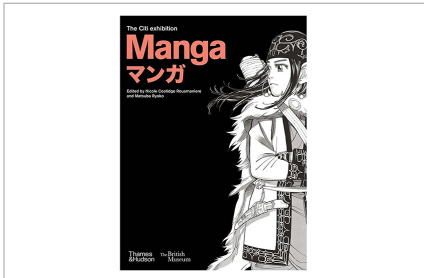
画像: New York Comic Con "Courtesy of ReedPop"



Japan Expo Paris

毎年7月上旬にフランス・パリで開催される世界最大級のジャパンフェスティバル。会期4日間の動員数は25万人を超える。日本文化の総合博覧会として、日本のエンターテインメントを網羅し、マンガ・アニメ・ゲーム、音楽・モード、書道や武道・茶道・折り紙などの伝統文化など、日本のポップカルチャーを展示している。

画像: 2022©FredericBre



『The Citi exhibition Manga』

イギリス・ロンドンにある大英博物館で2019年5月23日から8月26日にかけて開催された日本のマンガをテーマにした展示会。国外で開催されるマンガの展示会として史上最大規模。来場者がマンガについて理解と関心を深め、好みの作品を見つけられるよう、マンガのつくり方・読み方を手ほどきしつつ、マンガの歴史や社会との関係性、現代の作品が扱うテーマと表現方法の多様性などを紹介した。

画像: ©The Trustees of the British Museum / ©野田サトル／集英社



林士平 漫画編集者
SHIHEI LIN / Manga Editor

published_2024.12.25 / photo_kohey kanno / text_noemi minami / edit_shawn woody motoyoshi

東京は世界でも特別な場所。

旅行で行ったロンドンやロサンゼルス、上海などの街はどこも素敵でしたが、やっぱり住みやすいのは東京だと思います。東京に住むメリットはライブや展示会など、そういう生のエンタメに触れられる機会が多く、アニメの試写会なども多く行われています。特に六本木では数多くのアニメの試写を上映してきていますし、大きな美術館もあって、街が混みすぎているところがないですね。それぐらいの多様性があった方がいいと思います。

撮影場所：六本木 蔦屋書店

取材を終えて……

売れている漫画家は何か熱中してインプットすることを努力だとは思っていない、と林さんは話していましたが、林さんにもまさにそれが当てはまると思います。同時に 100 人近くの漫画家を抱えながら、隙間時間や休みの時間も漫画を楽しみとして吸収している林さん。そんな彼だからこそ作品への理解と漫画家への尊敬が深く、人気作を生み出し続けられるのだと思いました。(text_noemi minami)